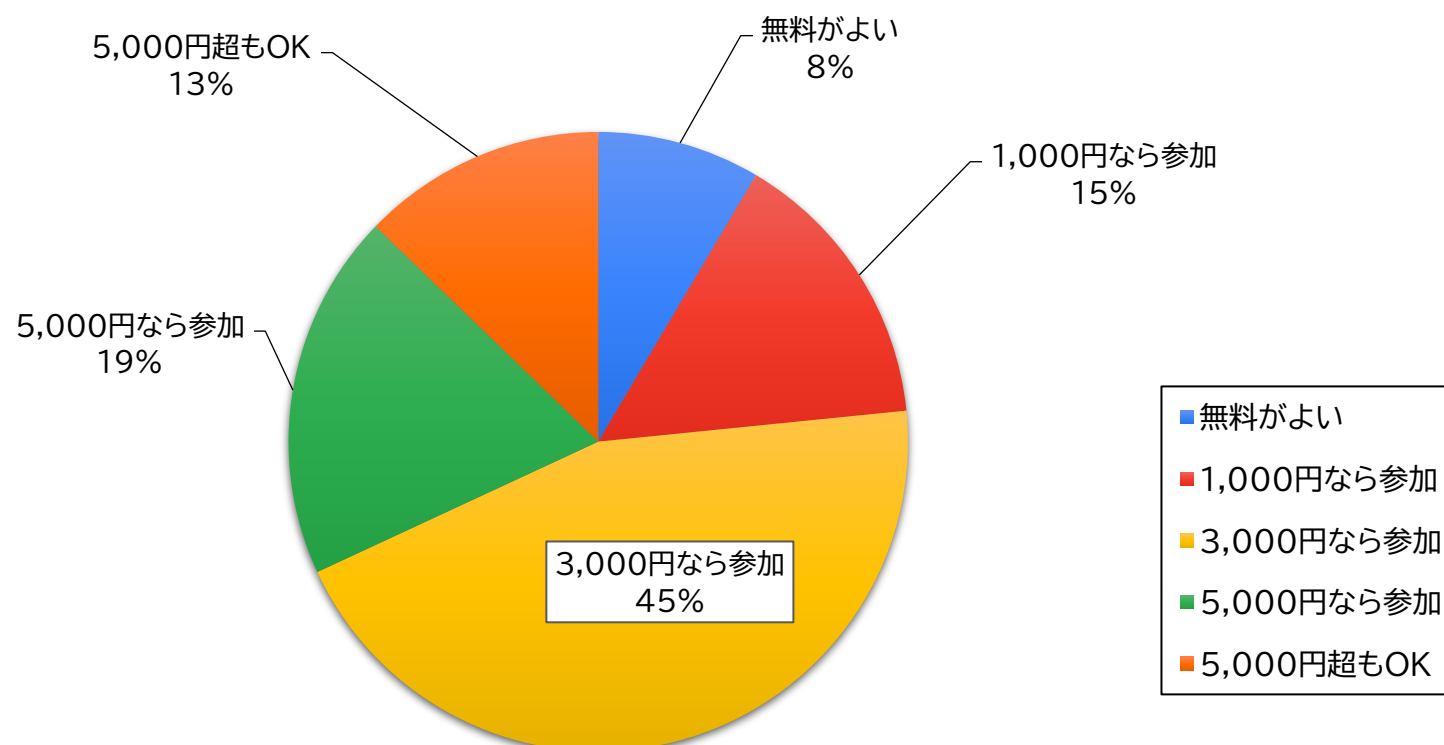


【開催日】2025年3月9日(日)13:00～17:00

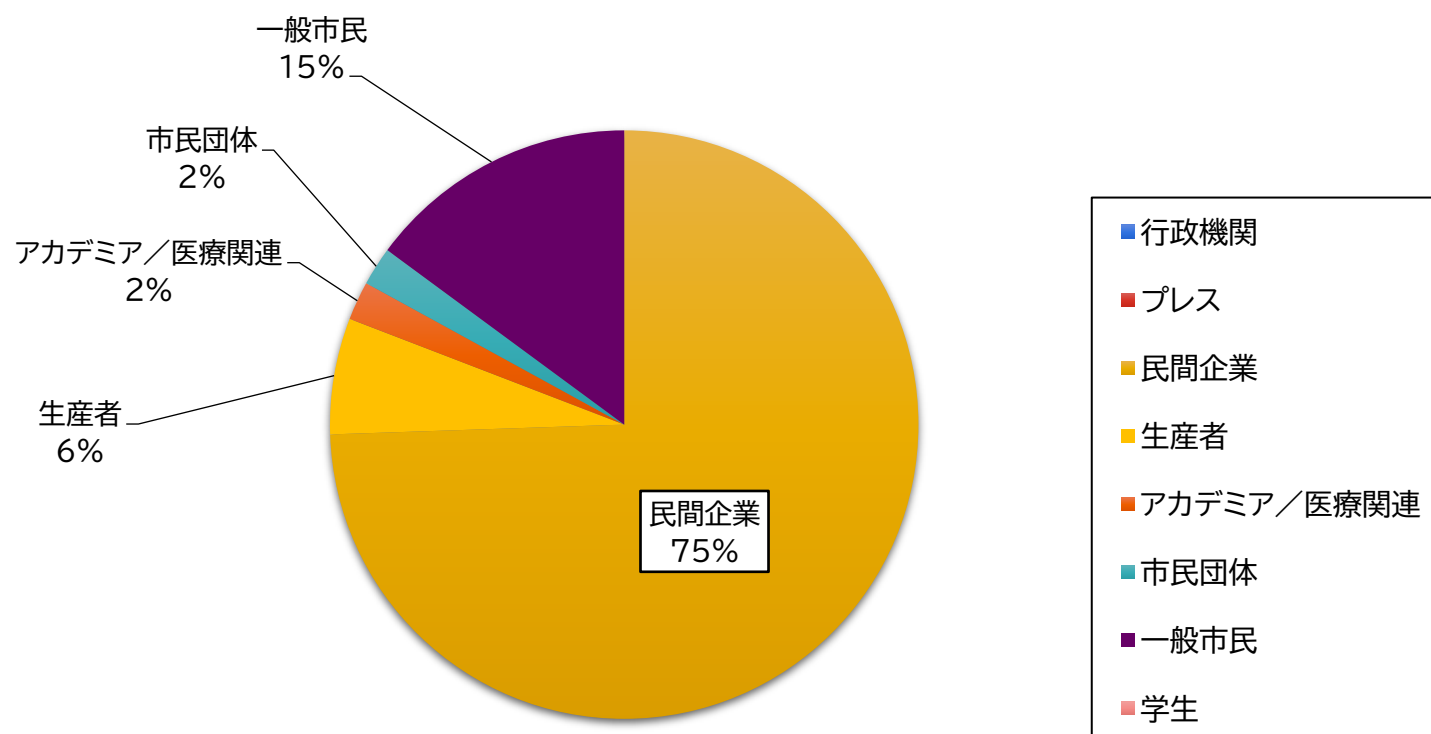
【開催場所】東京大学農学部フードサイエンス棟中島董一郎記念ホール+オンライン開催(Zoom)

アンケート回収数47枚(参加者:107名、演者7名を除いた回収率:47%)

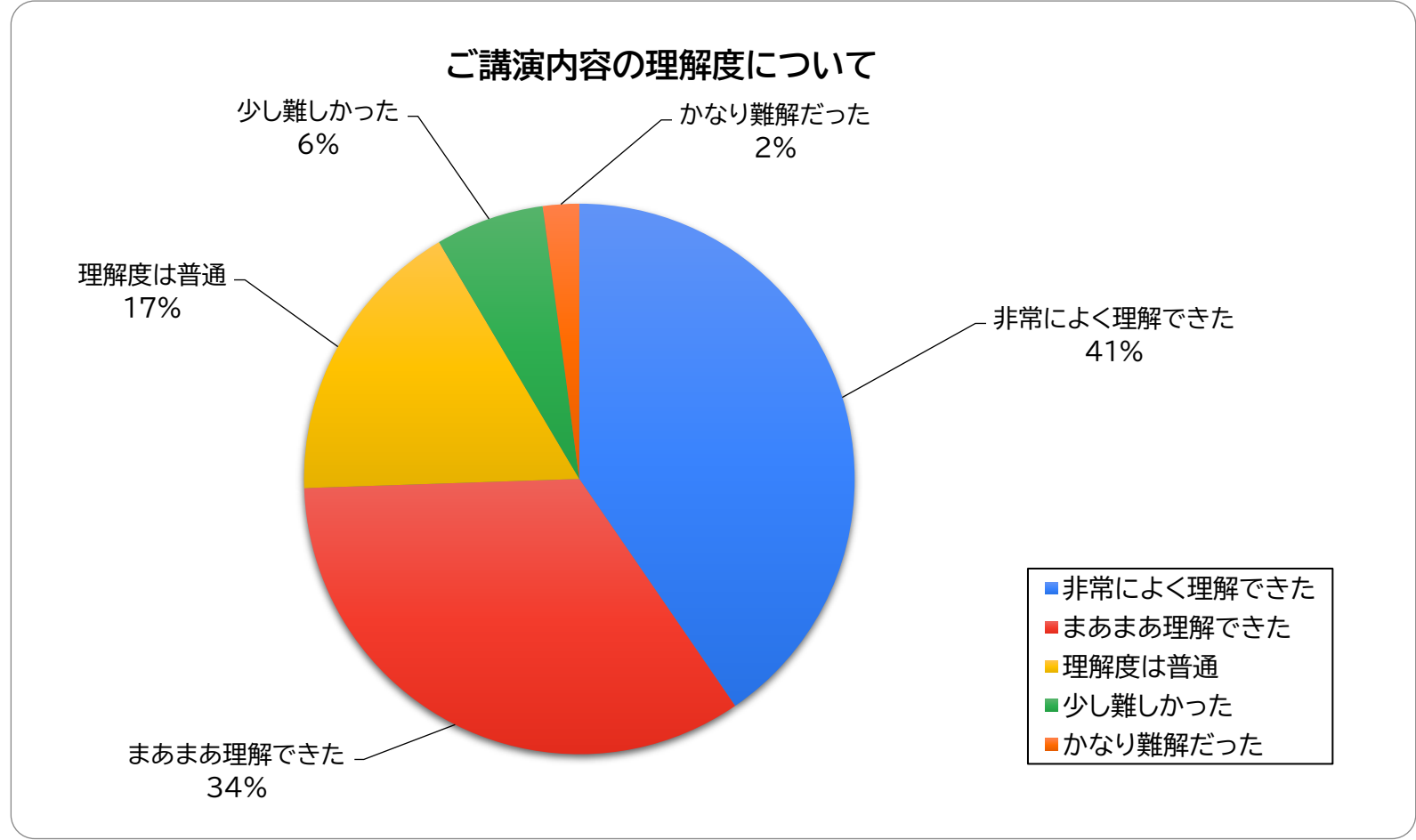
参加費(NPOへの賛助)について



参加者のご職業について

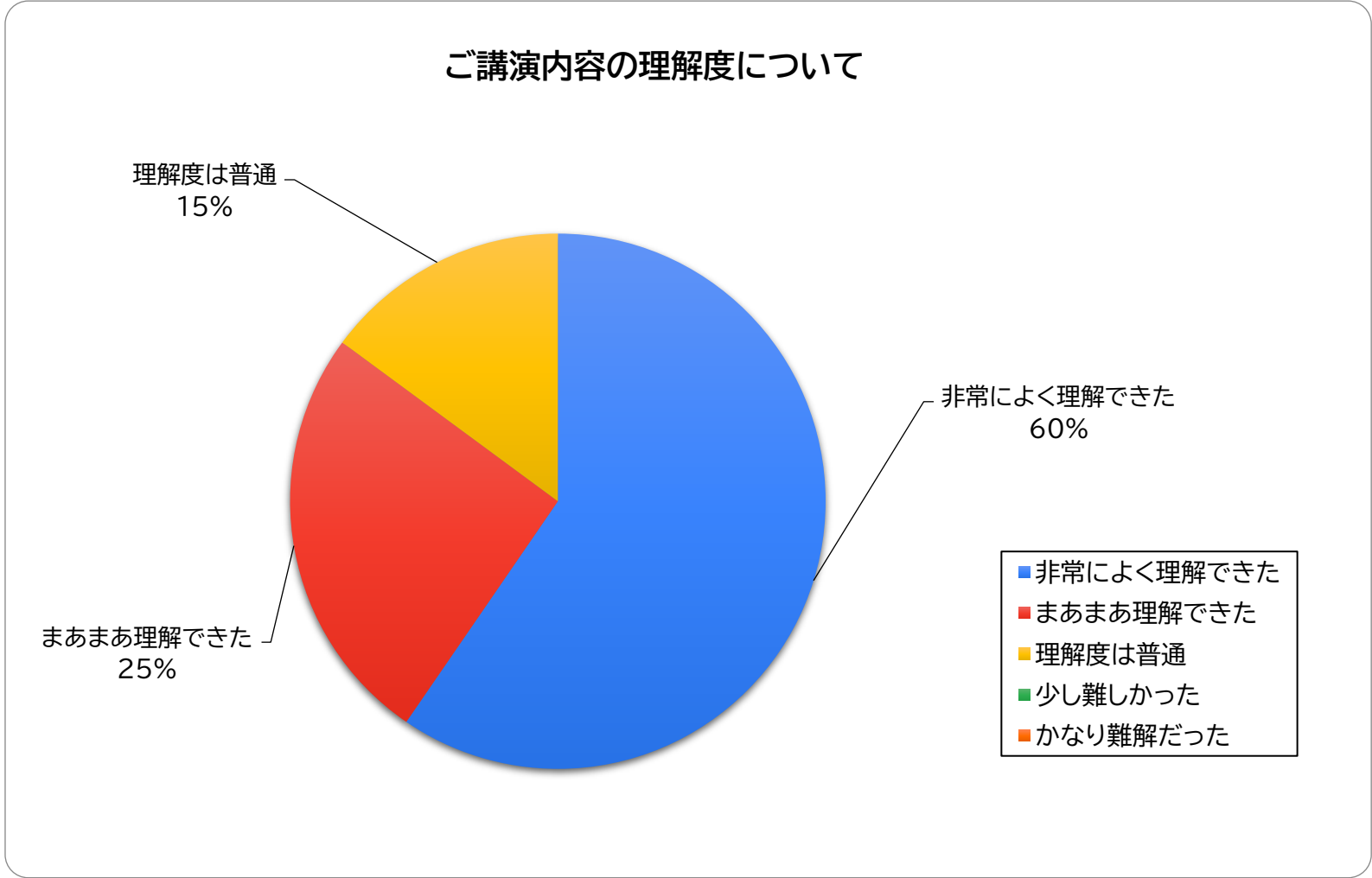


① 山口 治子(愛知大学 地域政策学部 教授)
『食品安全のためのリスクアナリシスにおけるリスクコミュニケーションの課題』



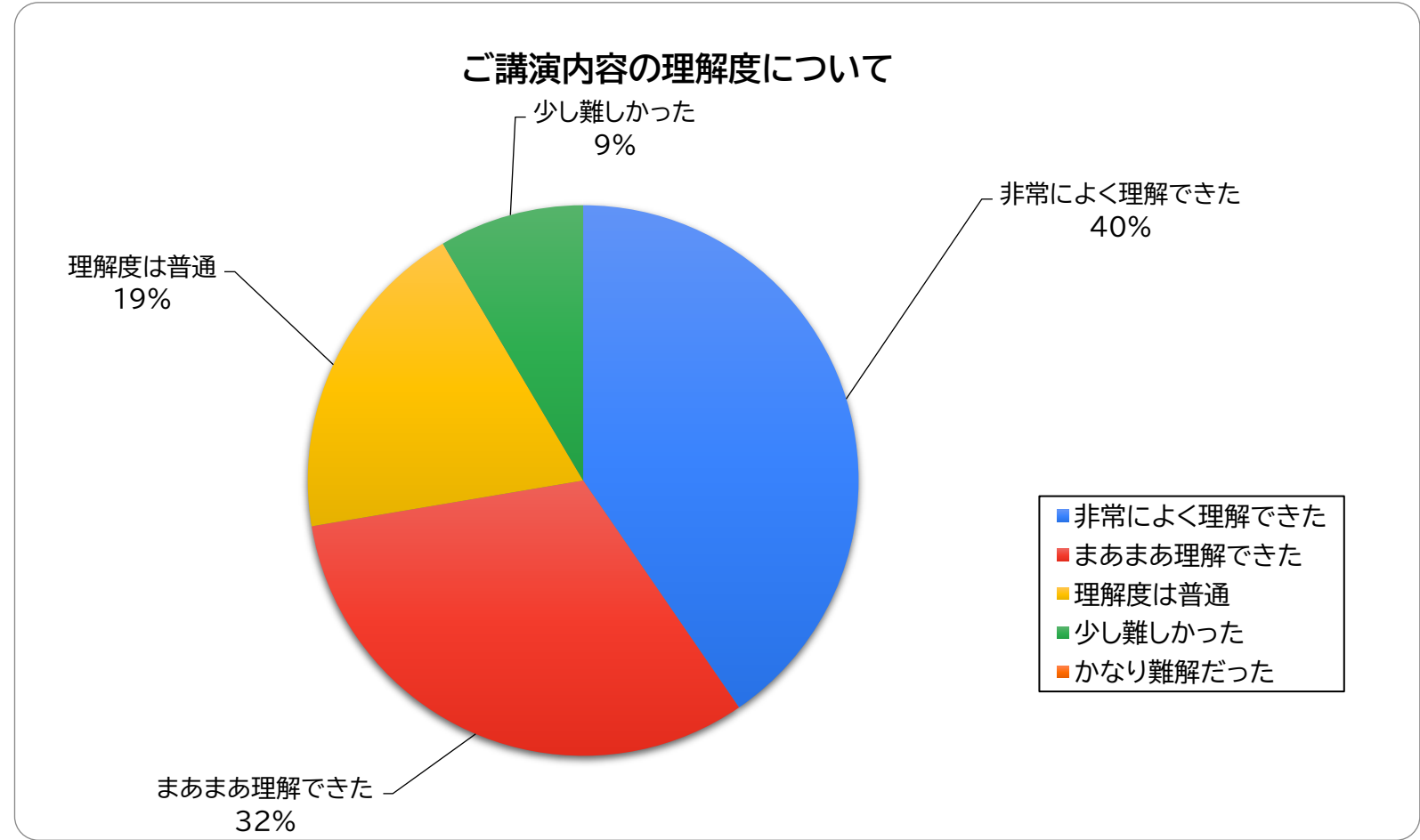
消費者が主観的にリスク評価されている点が特に勉強になりました。
スロビック博士の報告は難解ですね
リスクとベネフィットの両方提示し正しく判断するには、判断する能力が必要。義務教育から、システム2で熟考できるちからをつけることが大切だと感じた。
今後のリスコミのヒントがたくさんありました。
もっとじっくりお話を伺ってみたいと思いました。
リスクコミュニケーションは非常に難しいと思いますが、とても分かりやすく示唆に問うお話でした。
声が小さく聞き取れないところがあった。
リスコミの基礎を学びました
相手が受け入れられる届け方を考える非常に良い機会になりました。
アクティブマイノリティーの反対運動で消費者がベネフィットを得られないことについて、消費者が不安に感じるようになるとマスコミの姿勢が変わる可能性を感じました。マスコミのターゲットは読者の不安感なので。
ベネフィットも考えなければならぬと言うヒントをいただいた
専門家と消費者のリスク認識の違い、なぜ間違えるのか、非常に興味を持って拝聴させていただきました。ポイントを掲示していただき、熟考的な情報処理を行うように持っていくために、どうすべきか？リスクコミュニケーターとして、勉強してまいります。
山口先生の今回の講演で理解が進みました。専門家と消費者のリテラシーギャップの背景には意識高い系の消費者は科学的知識以前に主義主張に基づいた意識があります。意識は知識の裏付けがなければなりません。一般市民は理論的理解よりも要は安全なの？に尽きると思います、科学に基づき安全が確認されており断定的に大丈夫ですよ！！と簡単に自信をもって伝える。消費者の20%岩盤反対層へのリスクコミュニケーションは限界がある。不安につけこむ一部のメディア・出版物・商品・流通はこれからも無くなりません。70%のサイレントマジョリティーにはベネフィットを伝えて安心させる。 安心＝(安全 X 信頼)の山崎先生の数式がまさに当てはまります
消費者のベネフィットをどのように選択し、伝えるかがキーであると感じました。
最後のディスカッションで出てきたゲノムが倫理的な課題を抱えているとすると、解決には相当な時間が必要な、非常に難しい問題であると感じました。
リスク理解に限界がある前提でいかにわかりやすく伝えるかが重要。その中でも個人判断の部分においては、100%理解はありえないので、そこに向けてリスクコミュニケーションの頻度と手法の多様性(紙芝居的なものまで)が求められるが、専門家の方々だけではそこに行きつかないのが今後の課題と感じています。ここの変革なくば消費者のリテラシー向上は見込めないと考えます
理屈は分かるけど、実際の大衆は恣意的な人たちにミスリードされていないか？
リスクコミュニケーションの講演をあまり聞いたことがなかったので、聞き慣れないお話ばかりで、ついていくのでいっぱいいっぱいでした。専門家と消費者のリスク認知にギャップがあること、それを埋めるのが難しいことがよく分かりました。
40年間経っても状況が大きく進んでいないことに、リスクコミュニケーションの難しさを改めて感じました。同時に実施することの重要性も再認識できました。
食の倫理感、大変勉強になりました。人は理屈では動かないですから。
リスコミについてや、リスクに対する不安はベネフィットを理解することで軽くなるのかなど勉強になりましたが、少しお話が難しく感じるところとスピードが速く(時間が無いからだと思いますが)理解が難しかったです。
市民が情報を必要とするときは、その食品安全問題に不安や知識不足を感じたとき、情報が欲しいと感じる。情報提供の規定因子は不安と無知。6つの提供方法①不安に基づくか基づかないか。①情報提供を行うか行わないか。②ベネフィット情報、③リスク情報、②ベネフィット→リスク情報、⑥リスク→ベネフィットリスク情報:リスク認知を下げる。ベネフィット認知:全ての情報提供方法でベネフィットが上がったが、差は見られなかった。受容性:不安に非対応のリスクベネフィット情報以外は大きくリスク受容性が上がった。不安に対応した情報提供によってリスク受容性を上げる。
科学に基づいた正確な情報を提供するだけでは中々伝わらないことがよくわかりました。消費者の現状を踏まえたところからスタートしなければいけない難しさがあると分かりました。
専門家と一般市民の安全評価の比較で、安全評価が専門家よりも社員の方が高いという結果に関して、自身に置き換えて組織への愛着から安全と思い込んでしまい、リスクにつながらないよう注意したい
リスクに基づいた安全管理の仕組みを体系的に改めて学ぶ良い機会でした。リスクアセスメントは日頃実施していますが、リスクコミュニケーションの手法、進め方は今後の私の課題と感じました。

② 畝山 智香子(国立医薬品食品衛生研究所 客員研究員)
『食品添加物は何故嫌われるのか』



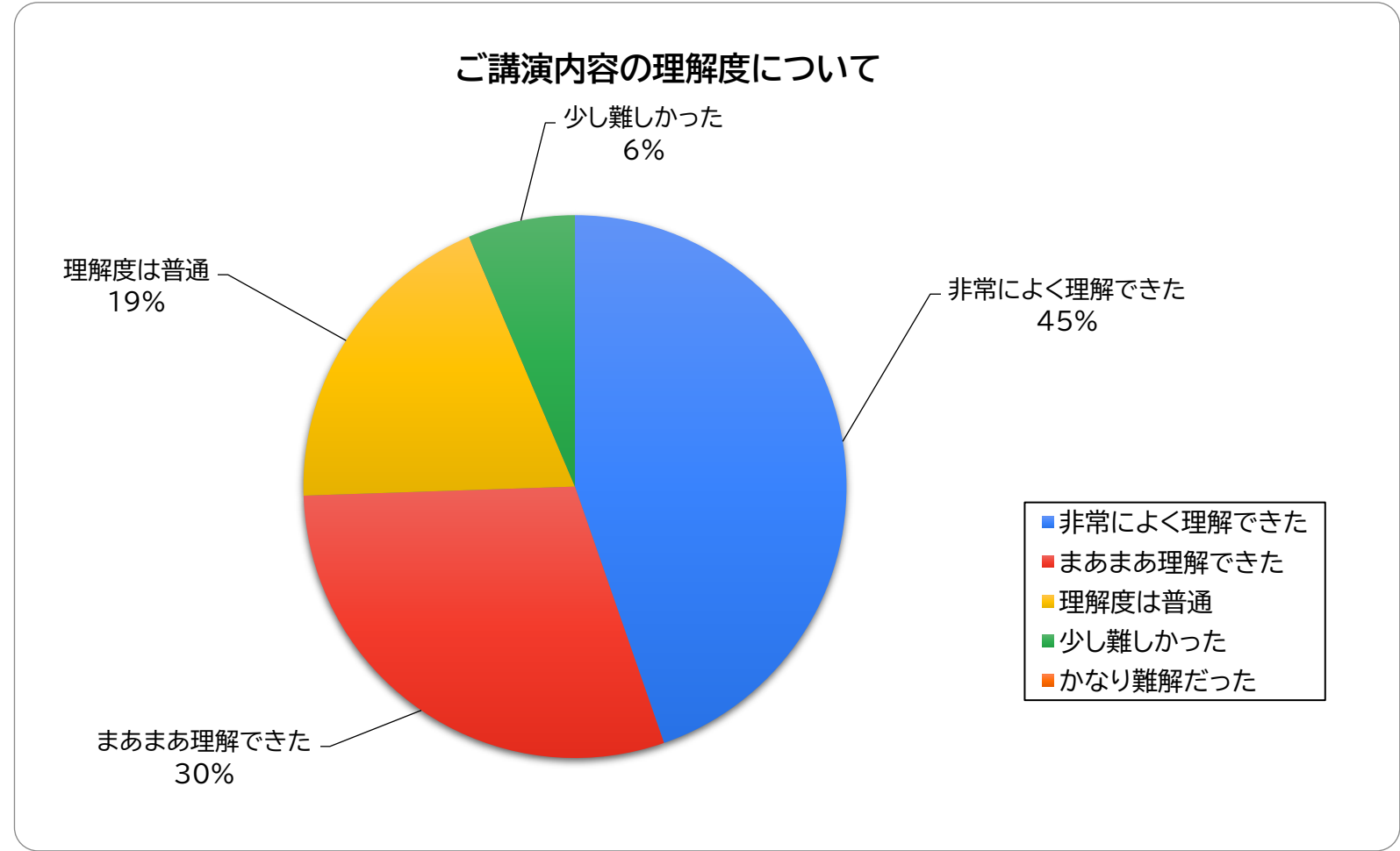
消費者が食品添加物を敬遠する理由の3点が勉強になりました。一方で、安全であっても安心するかは消費者の考えによるものがあるのではと考えています。
畝山先生の話をもどのように報道するのが問題です。新聞、TV、雑誌、ネット等。同じネタ元でも捉え方が違えば報道内容が変わる。メディア各社の社の方針で変わるのとは何とかならないでしょうか？
過去の食品事故の記憶から、食品添加物への正しい理解がされていない。さらにオーガニックや自然志向ブームで、無添加が体にいいものと発信するインフルエンサーの影響も少なくないのでは。
興味深くお聴きしました。
いつもながら、的確でわかりやすいお話でした。
流石畝山先生難しい内容をとても楽しく拝聴いたしました。
赤色3号報道の真意を聞くことが出来ました。
食品添加物の先入観に対する科学的なアプローチがとても大切だと感じました。
不使用表示のガイドラインといった施策で好ましい方向性が分かりました。また、情報が正しく伝わらないコミュニケーション、特に初動の発信についても、問題を感じました。また、食品添加物を使わないデメリットについて、消費者が不安を感じるようになれば、マスコミの姿勢も変わると思います。
食品添加物は各国ごとに定義がちがう、マスコミは正しく質問ができる記者が少ないので正しく正す研究者が必要
昔から食品添加物に関する誤解を解いていただけており、感謝申し上げます。今回、赤色3号の件もあり、興味深く受講させていただきました。今後も、いろいろと参考にさせていただきます。
赤色3号の事例説明を通して食品安全の歴史と背景を知ることが出来ました、いつもながらの明快で説得力のある講演でした、各方面への畝山先生の発信を期待します。マーケティング論をストレートに強調する数少ない専門家です益々期待します。無添加表示ガイドラインの遵守はかなり進みました(茅乃舎のダシ商品表示は襟を正しましたよ)、しかしながら健康食品に散見される具体的商品表示を伴わないCM等のメディア発信は依然として無添加のオンパレードです
具体的な事例もあり大変理解しやすかったです。
毎回理解しやすい内容でありがとうございます。PFASのご講演も楽しみにしております。
マーケティング戦略使用企業に対する、強い行政対応のできる環境整備が必要と感じます。消費者を中心とした関係者の利益を最大化するための正しい情報を提供する場、工夫が今後さらに求められる。「知っている」ことに対して自己満足してはいけなと再認識しました。
添加物は悪と洗脳をどう解くかは難題であると感じた
食品添加物が悪く思われるのには、理由があるということを知りました。誤った情報を持ったままの消費者の要求につけこむような報道や、企業のマーケティングがされている限りは、食品添加物が嫌われている状況がなかなか改善しないなど感じました。
お寿司チェーンや赤色3号他、近々の出来事を含め具体的な事例からご説明いただいたことで、とても分かりやすく感じました。分かりやすく伝えることの大切さを改めて感じました。
なぜ食品添加物のイメージが悪いのか、歴史から知ることができて理解が深まりました。食品添加物を使わないことで健康が損なわれるというお話は怖いことだと思うので、ゼロだから良いのではなく、適量で使用する事の有用性について改めてよく分かりました。
●食品添加物のリスクコミュニケーションが必要な理由 ①間違った情報で食品添加物を使わないことで安全性が損なわれる。ベビーフードひじき ②悪い情報を与えられただけで悪いと思ってしまう。食品色素。
赤色3号の話は非常によく分かりました。情報発信の難しさも確かにあると感じました。
消費者のイメージが悪い食品添加物ですが、食品メーカーとして「なぜ使用するのか・使用しない事よりも使用する事のメリット」等、知識を構築し正確な情報を発信していきたい
正しい情報を発信して理解されないと、消費者の利益を損なうので、どの様に情報開示(行政、企業、マスコミ等々)していくのかがポイントになる。
食品添加物という単語の強さが、誤解を生みやすいと感じました。判断の基盤となる教育が改めて重要と私は理解しました。

③ 原田 孝則(一般財団法人残留農薬研究所 顧問)
『残留農薬のリスク評価:特にグリフォサートについて』



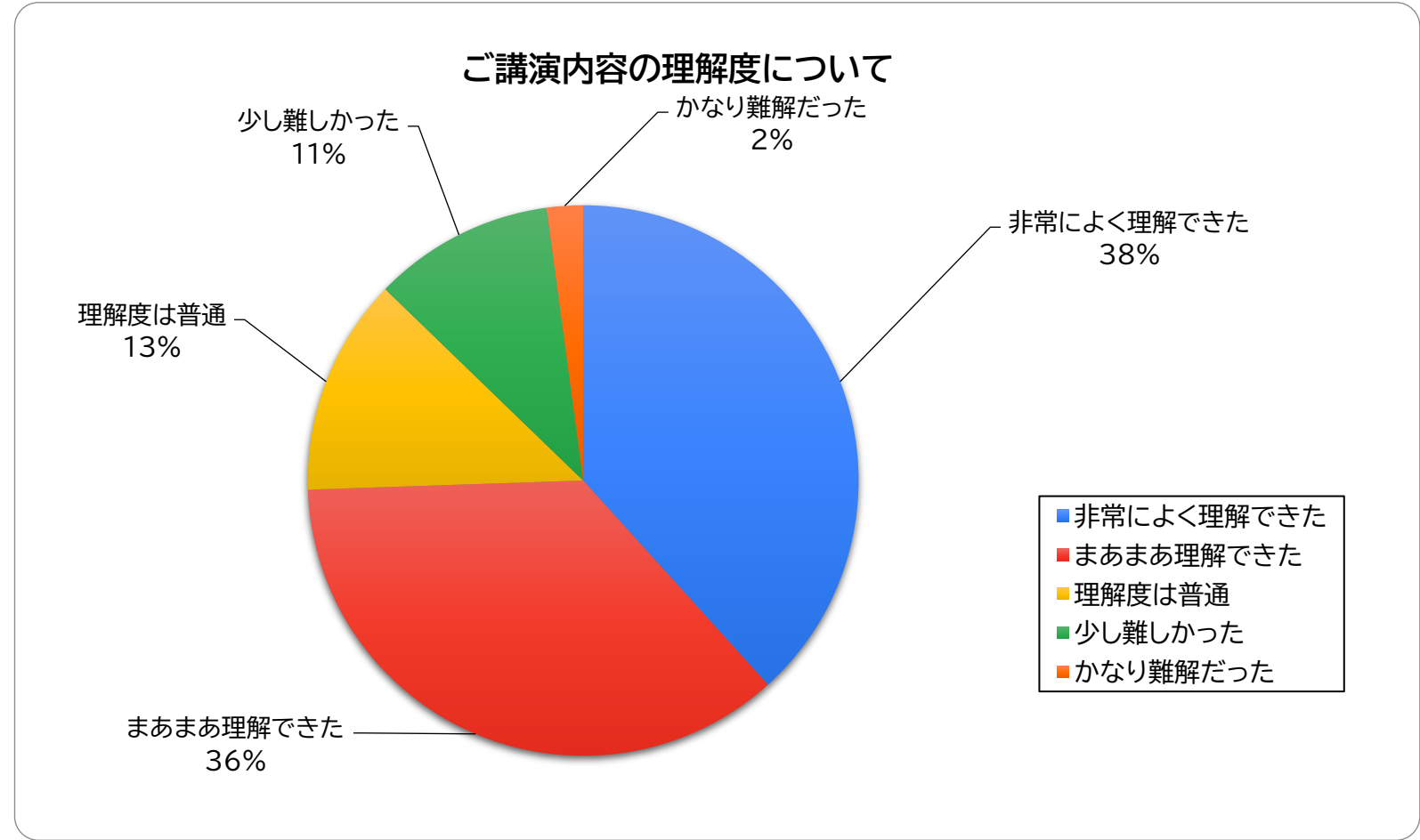
説明を聞けば理解できると思いますが使用していないというワードに消費者は流されることが課題。そもそも関心が小さいので短絡的に使用の有無で決める傾向をなんとかしないといけませんね
グループ2Aに分類された根拠、グループ2Aとはそもそも何か説明せず、「癌になる」という言葉をピックアップして報道され、誤解した人が多い気がする。
安全でありながら反対を唱える人への対応を考えさせられました。
今回は「グリフォサート」に的を絞られたお話でしたが、農薬、残留農薬の話は奥が深く難しいと感じた。
とても分かりやすい内容でした
農薬の評価方法や基準の決め方を知ると非常に安心できます。社内の勉強会でもそういう声があがります。今後も、継続していこうと思います。
昔のモンサントの技術部長のコメントに「使用するメリット(ベネフィット)を主張すべきだった」がありました。遺伝子組み換えの話題でしたが、グリフォサートもゼロリスク問題で、また、意図的な反モンサントのプロパガンダとも思います。ここでも、マスコミ、研究者、行政による統合的なベネフィットの広報が必要と思います。ポイントは安全とかいうのでなく、安全なのに合理的なベネフィットを受けられないことを無関心層に伝えることかも。経済や産業振興なら興味がある場合もあるので。北海道の飼料用コーン生産では遺伝子組み換えとセットで利用価値があるとの話題もありましたし。
安全性の高い農薬は多くのベネフィットをもたらすものですが、様々なところで、ごく小さなリスクが必要以上に取りざたされています。このような誤解を解くには、教育が必要と感じております。
客観的で分かり易い講演でした、一般消費者へのリスクコミュニケーションに加えてメディアへのアプローチが重要と思います。一般消費者は無農薬が安心と思っているだけで必ずしも無農薬農産物を購買していません。一部の生協や市民団体が輸入穀物のポストハーベストで不安を喧伝しているが、生協会員でも日頃輸入穀物産品を購買しています。グリホサートを知っている一般消費者は少ないです、高齢化が進み多くの家の庭の除草はラウンドアップに頼っています、ホームセンターにはラウンドアップが山積みです。農薬なくして日本の農業は持続出来ません。農業の規模拡大や産業化が進めば農業従事者の安全とコスト面からも適切な農薬の使用が確保されます
多くの農薬がありますので、難しいコミュニケーションだと感じます。
IARCの発がん性の分類を資料としてたびたび使用しますが、あらためてリスクとハザードの違いも同時に説明してゆく事が重要であると感じました。
有害作用強度だけに着目する、伝える現在の報道の在り方には懸念を持ちます。企業としても安全情報、正しい情報提供が必要と痛感しております
やはり、リスクマは大切だが、ゼロリスク無いことを如何に認知させるかが難しい
グリフォサートは、発がん性があるということは耳にしたことがあったので、IARCのグリフォサートの評価に問題があるということが分かって、すっきりしました。難しい話であるGLP試験について、分かりやすく解説いただき、農薬の安全性の評価の仕方について、知ることができました。
グリフォサートの件を詳しくお聴きしたのは初めてでしたので、興味深く拝聴いたしました。正しい情報を繰り返し伝えていくことの大切さを認識いたしました。
どのような検査をして安全性を評価しているかがよく分かりました。IARCについても勉強になりました。お話を聞く限り、その存在価値がよく分かりませんでした。
・日本GLP試験:発がん性リスク評価遺伝毒性・ラット長期発がん性・マウス長期発がん性・全て陰性。 GLP試験:ガイドラインに準拠された安全性試験。情報量が多く再現性が高い。 試験施設は組織の確立、3年に1回の国からの査察と、試験結果の計画から報告書までのプロセスを監視しており、正確に反映されているかデータの根拠などを確認する。 ・安全性評価:食品安全委員会が評価して、残留農薬基準(ADIを超えない範囲で作物ごとに基準値を設定する)、登録保留基準(基準値を超えると保留)、安全使用基準(使用者が守る基準)を担当省庁が決める。 ・安全評価:無毒性量に100倍を掛けて評価→ADI。ひとが生涯にわたり毎日摂取しても健康への悪影響は無い。 ・残留農薬の食品の人への健康影響は、ラベル表示された使用方法で適切に散布された農薬の食品への残留は基準値以下または微量なので、健康には影響が無いことを担保されてい
科学的なアプローチで非常によくわかりました。基準の決め方を知ると受ける印象も随分と変わりますね。
発がん性物質の分類基準・データ取得方法・評価手順等初めて知る内容が多く、畜肉メーカーに勤める中で添加物に対しても更なる知識を深めていきたい
リスク評価と管理・コミュニケーションの必要性が必要と感じた。
リスク評価内容を適切に理解し、誤解を生まないような言葉の選び方が重要だと改めて感じました。発がん性の評価内容を見ると正しく恐れる、構える態度が重要だと理解しました。

④ 田部井 豊(東洋大学食環境科学部 客員教授)
『遺伝子組換え／ゲノム編集食品の認知について』



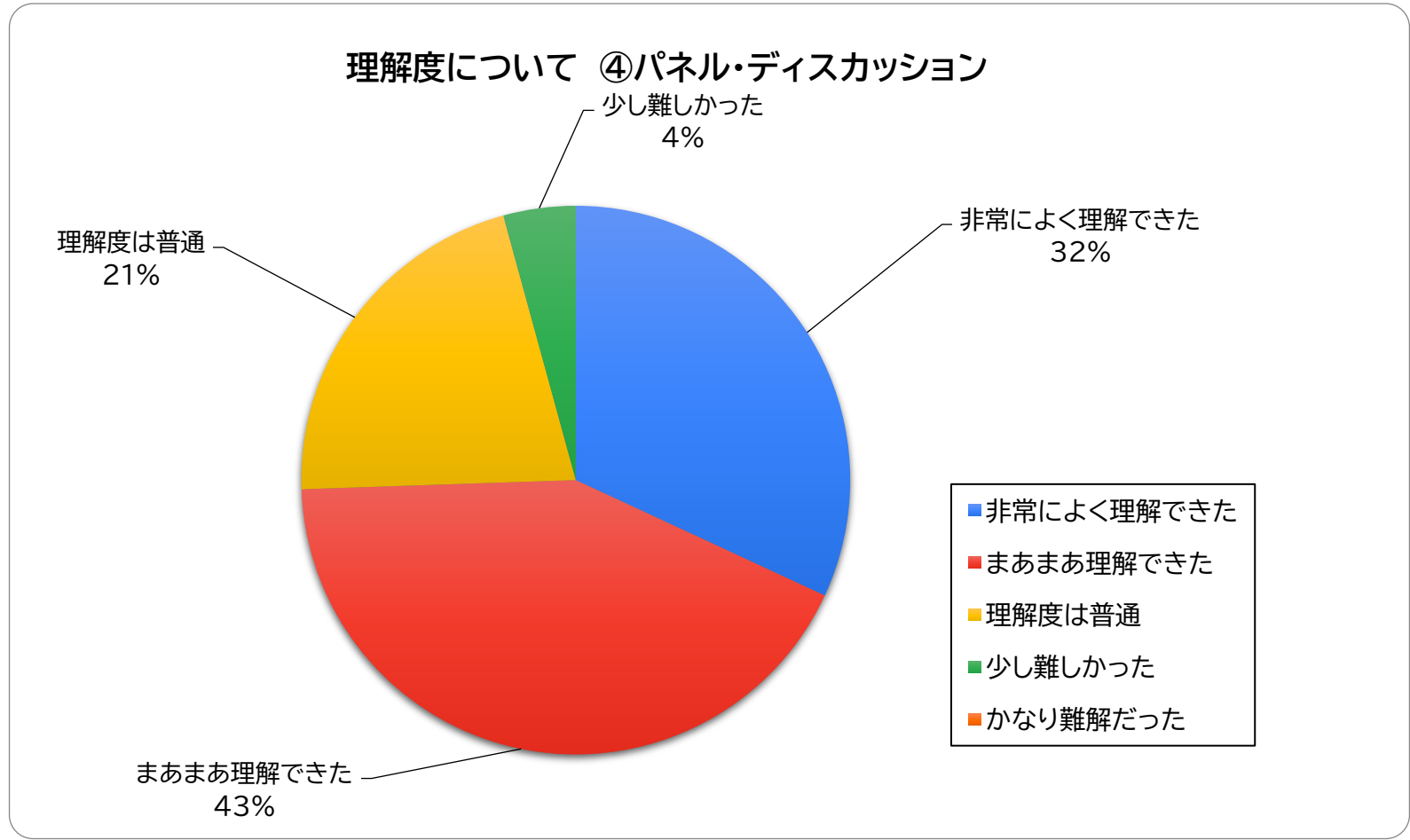
遺伝子組換え／ゲノム編集も添加物や残留農薬と同じ立場にいます。世界的にはこの技術が無ければ食料危機になるのに理解してほしいところです
導入時に、大きな反対運動が起こった遺伝子組み換え食品に比べ、ゲノム編集食品はあまり抵抗がみられないのは、無関心層が多いのに驚いた。無関心層は、ゲノム編集食品で何か事故(←ありえないが)でもあれば、反対派になびくのではないか。
リスコミを続けられてこられたご苦労を感じました。
市民の関心度・無関心度、興味の対象の分析が興味深かった。認知ギャップの解消は永遠の課題なのでしょうか。
気候変動で作物が取れなくなってくる中で、ゲノム編集技術は有効になってくると思いますが消費者理解や日本国内での展開についてご意見を頂けると幸いです。
これまでの品種改良が実はゲノム編集であると理解出来ると、心理的な受け入れハードルが下がると感じました。
関係者の努力で改善してきたが、無関心層が残る。この無関心層はこの問題での切り口に興味がないだけで、別の切り口、例えば産業振興、適正価格の食品ならば、ベネフィットに気が付く人もいるのかも知れません。この面で、繰り返し発信することで、ベネフィットを得られない不安、不満が国民(消費者)に広がり、マスコミのターゲットになるかも知れません。そこで新たに健全なリスコミのサイクルができるのでは、と思います。
年齢と学歴でゲノムにかんしてとらえ方が違う、
消費者において、遺伝子組み換えも多くの誤解で認識されています。すでに世界から遅れており、今後の安定な食料生産を考えると残念な気持ちとなります。
ノイジーマイノリティーが依然と反対を発信していますが、30年程前のメディアや消費者団体の反対騒ぎは知識・情報がなかったことによると思います一般消費者は遺伝子組み換え/ゲノム編集食品の認知は進んでいないのは難解なのと表示制度が変わってよくわからないので関心が薄れてきたのが実情です一般消費者は食品添加物表示に関心をもつものの遺伝子組み換え農産物(大豆・トウモロコシ)に関わる表示にはそれほど関心を持っていないのが実情のようです
遺伝子組み換えとゲノム編集を明確に区分したコミュニケーションが必要であると理解しました。
最近の遺伝子組み換えやゲノム編集食品の不安評価が減ってきている理由に、昨今の異常気象や環境変化に対する食糧リスクの解決策としての意義がある、と感じられ始めているのではないのでしょうか。
認知ギャップに対して、継続的コミュニケーションが必要。無関心層に対するアプローチ方法についても放置しては偽情報を絶たない限りギャップ削減は困難。初等教育の必要性についてはまさに同意いたします
やはり認知ギャップは、一般的にはマスメディアの影響が大きいとかんじる
遺伝子組み換え食品は、安全性審査を通れば安全性が確保できているということが分かりました。気候変動や安定した食糧確保などこれからますます問題となっていく中なので、遺伝子組み換え食品に対する消費者の認知ギャップが、経済的損失につながるということは大変なことだと感じました。消費者がネガティブになった理由が食品表示制度とお聞きし、食品表示制度についても改めて考えさせられました。
ネガティブな意見だけでなく、無関心層についても考慮しアプローチが必要であることについて、また無関心層へどのように伝えていくかが課題であることについて、理解を深めることができました。
GMOであるかどうかに限らず、絶対安全な食品が無いということで、正しく情報を理解することが大切だと改めて思いました。ネガティブな実験データなどが適正な実験方法をとられず得られているということなどは、一般の人には判断できないことだなと感じました。衝撃的な情報ほど拡散されやすく、興味がない層ほど、そういう情報に流されてしまうような気がしました。
○認知ギャップの解消むけて ・変異は自然界でも起きている。 ・組み換えやゲノム編集は必要である。 ・生産向上のメリットがある。 ・適切な安全性評価がある。 課題：無関心層にどう興味をもってもらうか。行動変容になんの対応が有効か。
遺伝子組み換え／ゲノム編集はそもそもそれが何か分かる人が少ない難しさがあり、難しすぎて「自分には関係ない」と感じるかもしれませんね。
遺伝子組み換え生物・ゲノム編集技術は生産性・環境面にとっても非常に重要な取組だという事が理解できた。国民のイメージも徐々に良いイメージに上がっているの で、これからも 今後の食の未来のために勉強していきたい
一般消費者に興味を持っていただく為に、行政が行う事と、企業が行う事、報道、マスコミが行う事を整理して進めないと、今後の環境変化についていけなくなると考えます。
自然に変化したものと人為的に変化させたものではプロセスが同じでも受け取り方が異なることを理解して、本質情報を伝えることが重要だと感じました。数年前ゲノム編集と遺伝子組み換えの違いが理解できず距離をとった私の過去を思い返しております。

⑤ 田内 広(茨城大学理学部 教授)
『食品中の放射性物質による内部被ばく』



単位がシーベルト、グレイ、ベクレルと複数種類あり混乱しています。最初に単位の関係性を説明いただけると理解が深まると感じました
福島原発の事故当時、未曾有の地震、甚大な津波被害もあり、国民が安全に対し敏感になった状態で、放射性物質に對しむやみに恐れていたように感じる。
わかりやすいお話をありがとうございました。
とても解りやすいお話でした。
実際にガイガーカウンターでの実験は目に見えて分かりやすかったです。
難しい内容をわかりやすく解説いただけた
実は日常的に被ばくしているということが分かった、ゼロでなくてはならないという考えが間違っているということがよく分かりました。内部被曝も排泄を考慮しないといけないことが良く分かりました。
体内被曝の話題はある程度報道されたが、頻度が足りなかったかも。報道面で、自然曝露・体内曝露/事故による外部曝露の割合が、平均的に数値化され、報道毎に参照されていると状況が変わったかも知れないです。マスコミの姿勢がゼロリスクの不安ベースあったからでしょうか。この姿勢が変わることが重要と思います。ガイドラインとしてはリスクの科学的な位置づけについて、報道でも義務化することができれば、と思いました。
放射性物質を口にすることがあるかという、一発目の話は、通常の講演であればとても興味を引くいい切り口だと思った。
福島原発事故の影響もあり、かなりのお金と時間をかけて政府はリスクミを実施していたと思います。そのような中、中国の処理水に対する非科学的な言動で、かえって国内では風評がなくなったような印象です(応援するような流れになった)。本来は、科学的な根拠に基づく判断が求められるべきですが、なかなか難しいと感じております。
放射線物質による内部被ばくの具体的で解かり易い説明を聞くことが出来ました、東日本震災当時に食品メーカー勤務でしたが流通から放射能ゼロとか検出限界の低い機器での測定を求められた苦い経験があります、当時の政府や流通は専門家の見解より一部の消費者の不安に振り回されていました。社会や消費者への冷静なリスクコミュニケーションがあったらもう少し混乱は抑えられたかと今思います
放射性物質の内部被曝については、福島の事故以降、発信されていたと認識していますが、海外の反応は別次元での議論でしたし、ヨウ素やカリウムではなく、セシウムやプルトニウムが注目されていたように思われますので、これらを対象とするコミュニケーションの難しさを感じます。
どちらかという安全側に沿った不安を取り除く内容と思いましたが、逆にこれ以上は本当に危険だ、といった話も何うことが出来ると良かったと思います。
検出限界の理解を促すことは民間、行政、専門家、メディアそれぞれで啓蒙していくことが必要と感じました
不安や知らないことばかりで、はじめからネガティブな印象を持ってしまう放射性物質による内部被ばくについて、例えによる解説など、田内先生の分かりやすく伝える工夫が素晴らしいと思いました。
普段から留意していることではありますが、簡単な例示に置き換える、線量計など実物・実際に体感することで、関心を持ちやすく、理解を深めやすくできることを改めて感じました。
ベクレル、グレイ、シーベルトの関係が分かりにくかった。福島より自然被曝が高い地域がきになるなあ。
自然界に存在する放射性物質について、分かりやすく理解できました。しかし、ベクレルやシーベルトなど普段の生活で聞きなれない単位がたくさん出てくると、聞いていて混乱してしまい、よく分からないということが不安を大きくしているなど感じました。情報の正確さと因果関係などの考察が大事だということがよく分かりました。
人工の放射性物質は天然の放射性物質より影響が大きい。→人工も天然も同じ。 核実験時代1960年現在の100倍くらいのトリチウムがバラまかれていた。 その後トリチウムは12年ごとに半分に減っていった。 セシウムも同様だが今の2万倍が降っていたい。。 過去に今の100倍のトリチウムがあったからと言って、その年代の人たちが全員癌で亡くなったということは無いので、安心して欲しい。 ・検出限界以下 少量を測定する場合:バラつきがあり、時間がかかる、放射性物質を見分けるのが難しい。 放射性物質を早くたくさん測る:検出限界を上げることが優先される。 幼児が5ベクレル食べた場合をケースリストがあり計算するとでも問題無い。 ・遺伝子の損傷と修復 放射線はDNAの損傷をたくさん作る。 1グレイで2000個くらいの損傷が1個の細胞に入る。8000個で死ぬ。 放射線だけではなく自然でも起こっている。活性酸素1000、紫外線1万、放射線0.0002(個/細胞・1時間)。 傷はなんとか細胞が修復している。
日々の被爆量、身の回りの放射線量などを理解できると、自分の中にゼロでない基準ができるので、そこからは安心感が増すと感じました。
放射性物質に限らず、リスクと摂取量の関係性に関してはしっかりとした検証が必要という事を学べました。
放射線は言葉の意味から過剰に恐れる傾向があると思います。自然にある放射線を適切に理解し、理解したことをわかりやすく伝え、正しく恐れることをマスコミや文書を書く人はしたほうが良いと理解しました。

⑥パネル・ディスカッション
『消費者のリスク認知バイアスを解消するための科学コミュニケーションとは』



取材を受けても記事がどのようなになるかはコントロールが難しい側面が理解でき、興味深かったです。
少し時間不足だったように思います。
質問を読んでいただき、ありがとうございます。
リスコミにより理解者は増えていても、ごく少数派の反対意見に大きな影響を受けていることの問題について、参加者の方々と共有できたと思います。
パネラーの方々の話と会場やオンライン参加者からの質問などをあまり伺うことが出来ず残念。
報道関連の方が正しい事を正しく不安をあおらないように報道いただく事最優先だと思いました。
消費者の手前にマスコミがいるので、そこへのアプローチが非常に重要で、かつ、難しいということも分かりました、マスコミとのコミュニケーションも大切だと感じました。
説明用のエビデンスが各分野で整備されつつあるので、これを如何に消費者に伝えるかについて、マスコミ、特にデスクレベルでの理解とガイドラインが必要と認識しました。できれば、マスコミの本来の市場のオリジンがゼロリスク不安の刺激ではなく、反対運動でベネフィットを受けられないことに対する消費者(国民)の健康や経済面での不安に転換されると、ゲームチェンジになると感じました。
結局食のリスコミだけでなく、科学的リテラシーと統計的リテラシーを高めないといけないのではないか。大人は放っておいて、子どもたちをターゲットにしたほうが早いのではないかと思います。
Q&Aは、非常に参考となります。いろいろな先生方の議論を聞いていく中で、何か発見できるのではないかと考えます。
メディアと初等教育への科学的コミュニケーションの必要性を改めて確信しました。各地の図書館本棚には食品安全基本法制定・食品安全委員会設置以前の旧態依然たる食品科学・理科の本が並んでいますこれを撤去すべきです
事例が多岐に渡るので、消費者とのコミュニケーションの難しさを感じています。
消費者とのコミュニケーションは、難しいと感じます。また、メディアがどのように取り上げられているかも少し理解できた気がします。
冒頭の山口先生の話が、まとめとして非常にわかりやすかった。小島先生の新聞記事の解説をお聞きして、記事が出来上がるまでの構造的な歪み？を学べたのは良かったです。このパートは今回先生も多かったので、もう少し時間が欲しかったと思います。
メディア業界の根幹的な課題、ビジネス・売上至上主義からの脱却、本質的情報提供メディアの台頭に期待。メディア向けのリスクコミュニケーション、リスク報道におけるガイドライン策定に同意。
見えない、因果関係が放射能のせいかわからないが怖い物。繰り返し、話を聞いて風化させないこと。これがリスコミなんだと
小島様のお話しで、記者がどのように記事を書いているのかが知れて良かったです。
メディアの重要性とともに、記者の事情など、難しい点についても具体的に知ることができました。こういった点も広く認知されると記事の読み方、受け止め方が変わる方も多くなるかもしれないと思います。
ほかの箇所を速度を速めて視聴していたのですが、このパートのみ通常速度で聞かないと早口でついていけませんでした。あきたこまちRが放射線照射技術でできた育種であることを知りました。
メディアの影響は大きいのに、取材先が本当に専門家かどうか分からない人への取材を記事にすることもあるということに驚きました。また、行政・団体など色々闇が深いということが感じられました。
・リスクコミュニケーションを資する科学的根拠を科学的評価の枠組みの中でやっていく。 ・ハザードの特定、暴露評価、有害性評価してリスク判定をしてリスクアセスメントしていく。 ・この先リスク制限に対して、経済的な影響、人の価値判断、リスク認知研究、リスクコミュニケーション研究など社会学的に行われている研究も組み入れながら科学的評価をおこなう。 ・専門家と消費者の知識の差が大きすぎるので、それを繋ぐリスクコミュニケーターの育成が必要。 ・消費者がリスクアセスメントを受け入れるには初等教育からリスク感覚の知識が必要と思う。
メディアへの粘り強い教育が大切だと感じました。
特に印象に残ったのが、解消する為のコミュニケーションとして、専門家と消費者の知識の違いが大きいという事が大きいという点で、食品メーカーに勤める人間として、消費者よりも知識を吸収できる環境にいる中で、確かな知識で消費者にベネフィットの部分・安心安全という点を伝える両面で、リスクコミュニケーターとしての役割を担えるようにしたい
分かりやすかったです。

⑦ 今回のフォーラムについて、率直に思われたことを何でもお教えてください

新たな気づきが得られ、刺激となりました。
今回は内容を詰込すぎた感じがありました。内容を絞ってもう少し深い質疑応答ができたらよかったように感じます
食品のさまざまなバザードについて、バザードの性質は違えど、課題には共通点が多いとあらためて感じました。
今回のフォーラムでは、解消するには至ってなく、問題点の洗い出しという感じがした。
会場での参加をさせて頂き 会場の雰囲気も感じられて非常有意義でした。
報道における両論併記の弊害と記事になるまでの経過、事件発生時に登場する専門家の選定などの説明は、業務の参考になりました。
いかに消費者が納得できる情報を分かりやすく提供するかが大事だが、確信犯的な方の誤った情報を鵜呑みにして信じ切ってしまう人への科学コミュニケーションは難しいと改めて感じた。
非常に分かりやすい丁寧な説明を有難うございました。これからも継続、拡大をお願いしたいと思います。
エビデンスの整理が進んできたこと、ある程度の実績が出てきたことがあり、さらには、リスク関係者がもっている不安感や違和感といったものについて、消費者と共有できるならゲームチェンジになるかも知れないと思いました。そのためには、ベネフィットとともにそれが得られない不利益を繰り返し発信する必要があるかなと思いました。消費者が正しく不安になることが必要かも。
講師の皆様のお話が明解で、良く理解いたしました。できるだけ多くの人に聴いていただきたい内容と思います。
非常に勉強になりました。ただし、まだまだどうすべきかは見えておりません。是非とも、第2弾、第3弾をお願いします。
リスクコミュニケーションの課題についてとても興味深く勉強できました
興味の無い人は何を説明しても理解しないし、覚えてもいない。それでいてSNSでもりあがると、初めて知ったかのように騒ぎ出す。
最近の食品添加物・GMO食品・ゲノム編集食品に関わる朝日新聞・毎日新聞の論調は以前に比べて科学的事実を伝える傾向になってきています。専門家・S.F.SS・食文化ジャーナリストの会勉強会・フーコムの発信が貢献していると感じています。松永和紀先生著「これ買うべき？」の本が書店・図書館に並ぶようになりました、前進です。
専門家によるフォーラムで、分野外の専門分野は理解のための勉強が必要だと感じました。
基本的に人間は自分の知らない事に対しては生きる術として単純にリスクを取らない方を選択すると思うのですが、問題が生じた場合、リスクを正しくハザート×暴露量として捉え判断してゆく事、他者に説明してゆく事が必要であると、あらためて学びました。
自身だけで知っているだけでは何も変わらない。山崎さんが取り組まれている活動が、メディア等への抑止になり、専門家の巻き込みにより正しい情報提供窓口となることの取組みに民間としても相対的に連携できることを模索したいと考えます
人の心は厄介。リスクは大切だが、無理にリスクと騒ぎ煽るマスコミ、群衆、流通のリテラシーを醸成して欲しい
リスクコミュニケーションの話をあまり聞いたことがなかったので、私にとっては全体的に少し難しいと感じ、ついていくのにいっぱいいっぱいでした。
リスクコミュニケーションの重要性和、その難しさを再認識いたしました。ただ、時間はかかったとしても、やらなければ進まないと思います。継続して取り組むこと、啓発していくことが最も重要だと感じました。
行政のリスクコミュニケーションってなんか計画消的なやらせ感がありますが、SFSSのフォーラムの活動自体がリスクコミュニケーションであると思いました。
消費者が不安を感じるトピックをぎゅっと詰め込んだ内容となっていて、非常に勉強になりました。
専門家、一般消費者、メディアそれぞれの認識の差が3方向にバラバラにかけ離れていると感じた。その認識の差を完全に無くすことは無理な事で、少しでもそれぞれの認識が近くなるために。 ・専門家:社会的な話題や問題になっている研究。誤情報のファクトチェック。社会学的な研究の拡大など。 ・一般消費者:体験型のイベントの参加、初等教育からのリスク感覚の知識。 ・メディア:専門家との日常的なコミュニケーション、 ・リスクアナリストの育成など。
アーカイブ視聴が非常にありがたいです。
食品メーカーの営業職ですので、食品添加物への細かな知識・遺伝子組み換え・残留農薬など知らない情報があり大変勉強になりました。確かな知識を持ち、消費者に確かな情報を伝えられるよう、また必要なものであるならば、悪いイメージを払しょくできるような取組を行って参りたい。
関心事の高い課題のフォーラムに参加できて大変勉強になった。私の理解不足が多いので、今後、自分事として興味を持っていきたい。
科学を伝えることは、難しく簡単ではないと総合的に感じました
まだまだ勉強することがあると感じました。

⑧ 消費者のリスク認知バイアスを解消するためには、どう取り組むべきでしょうか？ご意見をお書きください

正しく情報発信しようとするのと難しくなり、消費者に受けいられにくくなってしまおうのですが、新型コロナのように自身に影響の大きい問題であれば難しくても理解してもらえる。必要性をどう感じてもらえるかが大事で、問題が発生した時に正しく・わかりやすい情報を発信していくことを続けていくしかないと考えます。
SFSSの皆さまの発信と各メディアの偏向報道の是正
地道な活動が大切だと思います。
消費者の誤解についてのわかりやすい説明、反対意見についての対処法など、今後のリスコミについてさらに考える必要があるようです。参加者の方々とディスカッションするのもよいかと思います。
消費者のリスク認知バイアスを解消するのは、とても難しい課題だと思った。新聞記者教育のお話も出ましたが、担当記者も2、3年で異動してしまうため、せっかく教育してもらえてもらった頃には担当者が代わってしまうとお聞きした(食品会社の担当者が記者教育をしたときの経験を話してくださった)。学校教育の中で正しい知識・情報の読み取り方・考え方を何世代にも渡って積み重ねていくことも必要かと思った。
ありきたりですが、正しい知識の普及、啓発、誤った情報の削除になると考えます。
不安を持つ消費者の知りたい情報をわかりやすく提供すること(あきたこまちRの件での秋田県の対応は素晴らしく、参考になると思います)
どうしてもリスクよりの説明になるが、ベネフィットの理解が重要だと理解しました。
マスコミとのコミュニケーションも大切だと感じました。
アクティブマイノリティーの反対運動で消費者がベネフィットを得られないことについて、消費者が不安に感じるようになるとマスコミの姿勢が変わると思います。この方向性で反対運動の影響力を相対的に小さくすることができるのではと思いました。マスコミのターゲットは読者の不安感でもあったと考えますので、ベネフィットを得られない不利益を整理して繰り返し、マスコミ、民間団体、行政などから発信し、国民に正しく不安になってもらうことかなと。
地味なようですが、科学リテラシーの普及・啓発を小学校から続けていくことと思います。
リスクコミュニケーションを通して行っていく必要があると考えます。そして、長い時間が必要と感じました。一つの事象ではなく、食品添加物、農薬、放射性物質など、様々なことを科学的根拠に基づいて学んでいく必要があり、その過程で、リテラシーが向上していくと思います。微力ながら、正しい情報発信に努めてまいります。
興味があっても無くても強制的に教わる場所としては学校しか無いと思う。
正しいことをいかにわかりやすく伝えるかがポイントと思います。ゼロ、百でないことも重要と思います。
何かを変えたいと思っても他人を変える事は出来ないで、自分が変わるしかない、という事はよく言われますが、ではバイアス解消のために自分はどうあるべきか、どう変われば良いか…、時間をかけて考えたいと思います。
情報提供の場と頻度を高めるべく発信源を増やすことと考えます
情報が溢れている昨今は、情報リテラシーを高めるしかないが、大多数は科学的より社会学の傾向に流れているのは難しい
消費者の個人的要因は様々なので、フォーラムの中で山崎先生もおっしゃっていましたが、不安によりそうということが大切と思いました。何が不安で、その不安はなんで不安なのかを知り、その不安を解消していくように、双方向にコミュニケーションをとっていくべきと思いました。さらに、リスクだけではなく、ベネフィットも伝えていくべきと思いました。
発信側としてリスクコミュニケーターを増やし、受信側としてリスクや安全に関する学ぶ機会を義務教育の間に設け、国民全体の相互コミュニケーションを底上げする
メディア・消費者へのアプローチとともに、教育現場での正しい情報伝達も重要であると感じました。時間はかかりますが、効果があるように思いました。
山口先生のおっしゃったように消費者の深層心理まで研究する必要があるのではないのでしょうか。いくら安全だと言われても頭でわかっている、実際の消費活動に反映するとは限らないと思います。
間違っている点を一つ一つどこが違うのか説明をすると、正しい理解につながると感じました。ただ、それは関心のある層へのアプローチで、無関心層にはそもそも、なんとなく危ないという認識を変える機会を持つこと自体難しそうだと思いました。幼少期からのリテラシー向上に力を入れるのがとても良いと感じました。
・学生や市民に教育理解促進型、行政が課題に対して解決していく実践型、メディア向けのリスクコミ3つある。 ・記者に知って欲しいリスク。記者がどう書くかによって消費者の影響が大きく変わる。 ・記者向けのリスクコミが必要。 ・報道は価値があると認めるニュースしか報道しない。 ・記者の裏に専門家がいてある項目に対して、少しリスクがあると言うと価値あるニュースとして報道する。 ・ただ安全ですだと価値が無いので、情報の誤情報に対してファクトチェックすれば価値あるニュースになると思う。 ・専門家は社会的な話題や問題になっている研究をすればニュースに取り上げられやすいと思う。
メディアへの教育、消費者には身の回りの実情の理解などがあると良いと思います。
上記⑥ パネル・ディスカッション での感想として記載した内容と同様です。
興味を持っていただくような仕掛けは必要ですが、国が前面に立って取り組んでほしい。(国が支援している事は理解しているが、一般消費者には伝わっていない。本質を理解し、リスクを評価した結果を、正しく伝える言葉選びがまず重要だと感じました。社内でもお客様からのご指摘に向き合うとき、非常に考えるためです。もっと優しい講演会を行い、実際に話をして聞いてもらうことが必要だとも思います。そして若い方に沢山聞いてほしいであ。

⑨ 今後、食の安全・安心・リスクに係る分野で、どのようなテーマのフォーラムを希望されますか？

既に計画されているようですが機能性食品、特定保健用食品、栄養機能食品のあるべき姿
これらのリスクコミュニケーション、ベネフィットの認知バイアスに関してディスカッションいただけますようお願いいたします。
メディアとは仲良くしていかなければいけないとは思いますが食に関するメディアの偏向報道。入手情報の切り取り報道や裏取りのない偏った報道にどう対処するか
食品表示について 食物アレルギー
科学リテラシーの高め方、消費者の反対意見によって及ぼされている社会的、経済的損失の実情など、リスコミを発展させるために必要と考えられるものの情報提供があると興味深いかと思いました。
小島先生の新聞記事の読み方が大変参考になりました。新聞報道が消費者の動向に大きな影響を及ぼす中で、週刊誌を含む報道機関の報道に当たっての考え方や、記事に至るまでの行動などを掘り下げて解説していただきたい。
ファクトチェックの取り組み。
時事問題も大切ですが、同じことを繰り返し啓もうすることが大切だと思います。
アクティブマイノリティーについて、その形成、実態、影響、対策を調査する社会学的なアプローチが必要になるかも知れませんね。マスコミ、研究者や政府の関わり方も含めてです。
食品の過程での保存の仕方に関して。例えば、我が家でも、少し残ったご飯を、ラップでくるんでおにぎりにして、そのままラップごと常温で置いてあったりします。当然当然ラップの中は結露しています。多分どこの家でもあることのように思います。
学校給食における食の安全について、特に、有機礼賛のリスクについて、議論していただければと思います。
引き続き、リスクコミュニケーションについて、消費者心理、リスク認知等のテーマを希望します。
本日のパネルディスカッションでもありました「エビデンスメイク」の多方面での取り組み紹介があると良いと思います
食品安全文化関連のテーマ
養殖と昆虫食のちがい
年間をとおして幅広い分野のフォーラムを実施しているので十分だと思います。
アレルギー
食品添加物、残留農薬、遺伝子組み換え、ゲノム編集には興味があるので、毎年直近情報含め講義して頂くと、私の頭も更新できると感じた。
原子力に関する情報は、再稼働基調の原子力政策の中では重要と感じています。

⑩ 今回のオンライン・フォーラムについて、ご要望や改善すべき点がありましたら、ご意見をお書きください

今回は内容を詰込すぎた感じがありました。内容を絞ってもう少し深い質疑応答ができたらよかったように感じます。
パネルディスカッションで山崎さんのお話、感想が多かった。パネラーの方にもっとお話してもらえるようにしていただきたかった。
行政の協力の素、さらに裾野を広げていきたいですし、及ばずながら協力させていただきたいと思います。
今回レベルで十分ですが、さらには時間配分で、各講演において、やや短めに設定してもいいかも知れません。まとめに時間が取れるようにしたらよいと思います。
懇親会での参加者のリアルな経験が参考になりました。本編を16:30までにして、懇親会の時間をもう少し取れたらと思いますが。
たまには講師を少なくして、もう少し論点を絞ってもいいかなと思います。
パネルディスカッションはもう少し話を聴いていたいと思いましたので、制約はあると思いますが、時間を長く設定する、テーマを絞り込む、など良いかもしれません。
このままで良いと思います。

⑪ SFSS事務局へのご要望

貴重な情報がいただけるフォーラムの開催 誠にありがとうございました。
開催ありがとうございました！
本日もお世話になりました。ありがとうございました。
豪華な講師陣で、たいへん有意義な場でした。ありがとうございました。
盛りだくさんの内容をありがとうございました。
今後ともよろしくお願いします。
ありがとうございます。次回以降のフォーラムも参加させていただきます。
貴重な講演ありがとうございました。食品メーカーの営業として、今回の講演を通し、知識を深化させ、消費者に確かな情報を伝えられるよう尽力して参ります。
お疲れ様でした！